

200000072A

平成12年度厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業
「未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査」研究班

2000年度

未成年者の喫煙および飲酒行動

に関する全国調査

(修正版)

報告書

2002年2月

主任研究者 国立公衆衛生院次長 上畑鉄之丞

2000年度未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査報告書

主任研究者 国立公衆衛生院次長 上畑鉄之丞

分担研究者	国立療養所久里浜病院	鈴木健二
	国立精神・神経センター精神保健研究所	和田 清
	国立がんセンター研究所がん情報研究部	山口直人
	国立公衆衛生院疫学部	簗輪真澄
	国立公衆衛生院公衆衛生行政学部	大井田隆
	鳥取大学医学部衛生学教室	尾崎米厚
研究協力者	国立公衆衛生院疫学部	土井由利子
	国立公衆衛生院疫学部	谷畑健生

1. はじめに	1
2. 対象と方法	2
3. 研究結果・飲酒行動	5
4. 研究結果・飲酒行動の関連要因	8
5. 研究結果・喫煙行動	11
6. 研究結果・喫煙行動の関連要因	12
7. 研究結果・飲酒及び喫煙行動に関連する生活習慣	15
8. 集計表	21
9. 添付資料・調査票	61

I. はじめに

現代は、未成年者の喫煙および飲酒問題は医学や教育の分野を超えて大きな社会問題となっている。これは、未成年者の薬物使用とも関連して、ますます関心が高まっている。

子どもの喫煙による、急性及び慢性の健康影響は数多く知られている。急性影響では、呼吸器症状、体調レベルの低下、血管の変化、気管支上皮の変化、妊娠中の問題および肺の発達遅延等これらだけでも喫煙をしない十分な理由になるほど多くの健康影響が報告されている。慢性影響では、肺がんをはじめとして多くのがん、心血管系疾患、肺気腫、慢性気管支炎、壊疽、歯肉疾患、咽頭の感染、血圧上昇、胃潰瘍など多くの疾患のリスクを上昇させている。これらは喫煙期間が長いほど、すなわち未成年の内から吸い始めるほどリスクが大きくなり、がんの原因の中では予防可能な最大の原因であるとさえ言われている。しかし、たばこの成分であるニコチンは容易にニコチン依存を引き起こし、従って止めるのが極めて困難である。従って、未成年の内にとばこを吸わないようにしたり、既にいる喫煙者を禁煙するように支援することは極めて重要である。

アメリカ合衆国をはじめとして欧米諸国では、あるものは青少年の健康問題を含めた生活全般に関する調査で、またあるものは薬物使用に関する調査の一部として国家的な規模で未成年者の喫煙行動が調査されてきている。しかも、その多くは定期的に行われており、経時的な変化もつかめ各国の未成年の喫煙対策に重要な情報を提供してきている。一方、我が国には、未成年喫煙禁止法があるにも関わらず、多くの未成年者がすでに喫煙していると考えられているが、全国を代表するような青少年の喫煙行動についての調査は過去には行われておらず、近年になり1990年と1996年の2度行われているが、調査方法の違いにより単純に両調査の結果を比較できないでいた。

未成年者の飲酒問題は、アルコールによる健康障害のみならず交通事故や非行等さまざまな問題と関連があり大きな社会問題となっている。また、飲酒行動が低年齢で開始されるほどそれらの問題は大きいと言われ、中高生からの飲酒教育が重要視されている。アメリカ合衆国をはじめとして欧米諸国では、あるものは青少年の健康問題を含めた生活全般に関する調査で、またあるものは薬物使用に関する調査の一部として国家的な規模で未成年者の飲酒行動が調査されてきている。しかも、その多くは定期的に行われており、経時的な変化もつかめ各国の未成年の飲酒問題対策に重要な情報を提供してきている。一方、我が国には、未成年飲酒禁止法があるにも関わらず、多くの未成年者がすでに飲酒していると考えられているが、全国を代表するような青少年の飲酒行動についての調査は1996年に1度行われたのみであり、その後の動向はつかめていない。

また、未成年者の喫煙や飲酒行動に関連する要因を明らかにすることは、喫煙対策や飲酒対策を策定するに当たって重要な情報を提供することにもなる。そこで我々は、1996年の全国調査の結果と2000年の実態を比較するために、1996年の調査と同様な全国を代表するような科学的な調査方法による青少年の喫煙行動についての調査を企画した。さらに未成年者の

喫煙や飲酒行動は合法、非合法薬物使用やエイズ予防行動等のみならず青少年を取りまく多くのライフスタイルは健康に関する行動とも密接な関係があるといわれているので、喫煙行動や飲酒行動と食生活、学校生活との関連も調査した。これらにより全国の中・高校生の喫煙および飲酒行動の実態およびその関連要因が明らかになり、未成年者の喫煙および飲酒対策をさらに推進するための基礎資料を提供することができる。また、喫煙率および飲酒率に関しては地域ブロック別の特徴を明らかにすることも目的とした。これは地域ごとのきめの細かい喫煙対策に活用できる情報となると考えられた。

さらに、前回の調査結果は健康日本21の青少年の飲酒及び喫煙行動に関する目標値に関するベースライン値になっているが、その最新の情報を提供することにもなるし、定期的に調査を繰り返すことにより行政政策の評価も含めた実態のモニタリングにもつながる。

II. 調査方法

1. 調査対象および調査内容

調査デザインは断面標本調査であった。調査は全国の中学校および高等学校（全日制の私立・公立高校）を対象とした。1999年5月1日現在の我が国の学校名簿である2000年全国学校総覧に登録されている中学校11,220校、高等学校5,315校のうち中学校132校、高等学校102校を抽出して調査を行った。調査時期は2000年12月～2001年1月末であった。

1) 抽出方法

抽出方法は層別1段クラスター抽出であった。地域ブロックごとの喫煙率および飲酒率を検討するために、層別抽出は地域ブロックを層とした、学校間の喫煙率および飲酒率のばらつきが高等学校の方で大きいことが予想されたので、地域ブロック別の飲酒率の信頼区間を狭くするために高等学校の地域ブロックの区切りを大きくした。従って、中学校は12層、高等学校は6層の層をつくって抽出した。学校生徒への調査の場合は、クラスや生徒個人を抽出した学校内で無作為に選ぶのが煩雑で、学校スタッフの調査への協力も得にくいことから抽出された学校の生徒全員を調査対象とした。従って、学校を1つのクラスターと考えた抽出法を採用した。

抽出標本数（サンプルサイズ）は、1990年に行った中・高生の喫煙行動に関する全国調査で得られた学校別喫煙率の分散と調査回答率を利用して算出した。すなわち、学校単位の飲酒率とその学校間での分散が喫煙率の場合と同様であると仮定して計算を行った。中学校では、全国の喫煙率および飲酒率の推定値の95%信頼区間が±0.5%であるためには112校必要である。±1%であるためには30校で十分である。また、地域ブロック毎（北海道、東北、北関東、南関東、北陸、東海、近畿1、近畿2、中国、四国、北九州、南九州の12ブロック）の喫煙率および飲酒率も明らかにしようとするればさらにサンプルサイズが増える。喫煙率および飲酒率の推定値の95%信頼区間が±2%であるためには121校のサンプルが必要で

ある。従って、中学校は120～125校くらい抽出すると、地域ブロック毎の飲酒率もある程度推定でき、かつ全国の飲酒率の95%信頼区間もかなり狭く推定できる。

高校では、全国の飲酒率の推定値の95%信頼区間が $\pm 0.5\%$ であるためには797校も必要である。これは学校別喫煙率の分散が中学に比較して極めて大きいからである。この現象は飲酒の場合も同様であると推定できる。 $\pm 1\%$ であるためにも186校も必要である。 $\pm 1.5\%$ であるためには、99校、 $\pm 2\%$ であるためには58校必要である。高校では、地域ブロック毎の飲酒率を明らかにするためにはさらに大きなサンプルサイズが必要であるため、地域をもっと大きく分割しなければならない。地域を6ブロック（北海道・東北、関東、北陸・東海、近畿、中国・四国、九州・沖縄）にまとめた場合、地域ブロック別の飲酒率の95%信頼区間が $\pm 2\%$ であるためには、166校必要であり、 $\pm 3\%$ であるためには97校が必要である。高校は平均在校生徒数が中学の約2倍であることを考えるとあまりサンプルサイズを増やせないで、調査対象校数は100校が適当だと考えられた。

このような過程で決定した抽出数に少数の上乗せをして、中学校132校、高等学校102校という抽出数を決め、次いでその数を地域ブロック別の生徒数に従って、わりふって地域ブロック別の抽出数を決定した。各地域ブロックの抽出数は表1に示すとおりであった。各地域ブロックにおける調査対象校の抽出は各校の生徒数に従って行った。これは確率比例抽出といい、生徒数の大きい学校ほど抽出確率がたかくなるのである。

2) 調査内容

調査内容は、過去に我が国や諸外国で行われた未成年者の飲酒行動に関する調査内容を参考にして決定した。飲酒頻度、初めての飲酒年齢については、アメリカ合衆国等の諸外国の調査との比較ができるように同一の基準を設けた。飲酒量、飲酒機会、飲酒場面、飲むお酒の種類、入手経路、お酒を飲んで失敗した経験等は、それぞれの国により特徴が異なるので我が国で今までに行われた調査を参考に、多少の修正を加えて作成した。飲酒行動の関連要因として飲酒に関連のある疾病と出来事についての知識、飲酒は体に悪いと思うかどうか、未成年の飲酒禁止に対する意見、学校で飲酒と健康について教わった経験の有無、家族で未成年の飲酒について話したことがあるかどうか、家族や友人の飲酒状況、親とのコミュニケーションの量（親と過ごす時間の長さ、親に悩みを相談する方かどうか）、親に飲酒を勧められたかどうか、親に酒を飲んでいるところを見つけたことがあるかどうか、朝食の摂取頻度、ジュース・炭酸飲料・コーヒーまたは紅茶の摂取頻度、クラブ活動への参加状況、学校が楽しいかどうか、将来の希望進路、喫煙状況を尋ねた（添付資料1）。今回の調査は前回調査に加え、スナック菓子の摂取頻度、睡眠状況、うつ状態に関する項目を追加した。特に睡眠やうつ状態については、海外の文献に喫煙や飲酒行動がこれらと関連があるという報告がみられるようになったからである。また、ニコチン依存症判定についての質問群は今回削除したが、その理由は前回調査において毎日喫煙者の多くはニコチン依存症であり、ほぼ同義であると考えられたからで、質問数を少なくするために削除した。

2. 調査の実施

1) 調査手順

抽出学校の学校長宛に調査の協力を依頼する文書と共に在校生と全数分の調査票を送付した。調査の協力を受諾した学校は、各教室内で担任が調査票を配布して調査を行った。生徒は自記式無記名の調査票を記入直後、各自に同時に配布された糊付き封筒に調査票を封入した。調査に際しては、喫煙や飲酒を肯定したり、否定したりする発言をしないこと、生徒の調査票記入中に席を回ったり、のぞき込んだりしないこと、調査開始時にこれはテストではないのでありのままを書くように言うこと、先生は封を開けないのでプライバシーは守られると言うことを教師に守ってもらうように調査の実施手引きを配布した。教師は封筒を回収し、封を開けないままに宅急便にて国立公衆衛生院まで返送してもらった。

2) 調査票回収状況

中学校は132校に依頼し、99校より協力が得られた（学校協力率 75.0%）。地域ブロック別にみると回答率にややばらつきがみられ、近畿Ⅱ、東海、関東Ⅱ、中国、北九州で高く、北海道、関東Ⅰで低かった（表1）。高等学校は102校に依頼し、77校から協力が得られた（協力率 75.5%）。地域ブロック別にみると北陸・東海と関東で低い傾向が認められた（表1）。しかし、中学、高校とも1996年調査のような地域ブロック別の協力率の大きな格差は認められなかった。また、中学、高校とも10%近い協力率の上昇が認められた。調査票は107,907通回収され、性別あるいは学年が不明なもの、および回答内容に矛盾のあった1,610通を除いた106,297通を解析対象とした。たとえば、ある質問で「飲酒したことがない」と回答しながら別の質問で「毎日飲む」と回答した場合や現在の学年より高い学年で初めて喫煙したと回答した場合（飲酒の場合は初めての年齢を聞いているのため留年者などの場合もあるので必ずしも矛盾かどうか分からない）などを矛盾データとして除外した。

そのうち中学の有効回答数は47,246通であり、協力校生徒数の89.5%、調査対象者数の66.1%であった。高校の有効回答数は59,051通で、協力校生徒数の87.3%（中高あわせて88.2%）、調査対象者数の59.3%（中高あわせて62.2%）であった。調査対象者に占める回収数割合は高校でやや前回調査より下回った。これは、生徒数の多い学校で拒否が多かったことによる。また、協力校生徒数に占める回収数割合が前回よりやや低くなったのは、年々増加傾向にある不登校者によるものと考えられる。

3) 集計解析

集計はSAS for Windows version 8.2 (SAS Institute Inc. USA)で行った。喫煙および飲酒行動と関連要因とのクロス集計表以外の表の相対度数(%)は、本調査の抽出方法に従って算出した。

クラスター抽出であるため各層におけるそれぞれの質問項目に回答した者の割合は、各層における調査数を分母にし、分子を各質問項目に回答した者の数をあてればよい。全体の割合を算出するには各層の割合にそれぞれの層の重みを掛け合わせた値を加えていくことで得られる。重みは各層における母集団の生徒数の総計を分子に、全国の全生徒数を分母にして得られる値である。

関連要因についての解釈を助けるために、基準となる要因の状況を設定し、基準状態における喫煙率や飲酒率を1とした場合の、その他の状況下での喫煙率比および飲酒率比を表現した。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 飲酒行動

1) 飲酒状況

性別学年別飲酒状況をみると、飲まないと回答した者の割合が男女とも学年が上がるにつれ減少していた（表2-1）。一方、月1~2回飲酒、週末ごとの飲酒および週数回の飲酒をする者の割合は男女とも学年が上がるにつれ増加した（表2-1）。週1回以上飲酒する者の割合は男子では中学1年で3.9%（1996年4.4%）であったのが、高校3年では17.0%（1996年16.8%）にも上っていた。女子では、中学1年で3.3%（1996年3.1%）であったのが高校3年では8.7%（1996年7.0%）に上昇した。特に高校女子の飲酒頻度の増加が示唆された。毎日飲酒する者の数は少なくはつきりした傾向は認められなかった。男子は女子に比べ飲酒率が高い傾向にあった。

この飲酒状況を地域ブロック別にみると、中学1年男子では、北九州（福岡、長崎、佐賀、大分）、近畿Ⅱ（奈良、和歌山、滋賀）、四国の飲酒率が高い傾向にあった（表2-2）。中学2年男子では北九州の飲酒率が高い傾向にあった。中学3年男子では近畿Ⅱ、北九州、北海道で飲酒する者の割合が高い傾向にあった（表2-2）。高校男子では中学校でみられたような地域ブロック別の飲酒率の大きな差は認められなかった。高校2年で九州・沖縄で飲酒率がやや高い傾向と高校3年で中国・四国での飲酒率がやや低い傾向が認められた（表2-3）。中学1年女子では北九州、北海道、近畿Ⅱの飲酒率が高い傾向がみとめられた。中学2年女子では、北海道、北陸の飲酒率が高い傾向が認められた。中学3年女子では、北九州、北海道、東海での飲酒率が高い傾向にあった（表2-4）。高校2年女子では近畿で飲酒率が高く、高校3年女子では北海道・東北で飲酒率が高い傾向が認めとめられた。男女、中高を通して、北九州、近畿Ⅱ、北海道といった飲酒率の高い地域が存在することが示唆された。

この30日間の飲酒日数をみると、男女とも0日の者の割合が学年が上がるにつれ減少し、1日以上者の割合が上昇する傾向にあった。この30日間に10日以上飲酒した者の割合は中学1年男子で1.3%（1996年1.9%）であったのが、高校3年男子では7.5%（1996年7.0%）

に上昇した。同様に中学1年女子では1.2%（1996年1.3%）であったのが、高校3年女子では3.2%（1996年2.5%）と男子しに比べ小さな増加であった（表3-1）。

地域ブロック別にみると、中学1年男子では北九州、北海道、四国でこの30日間で飲酒した日数が1日以上者の割合（月飲酒者率）が高い傾向にあった。中学2年男子では北海道でつき飲酒者率が高く、中学3年男子では北海道、北九州で月飲酒者率が高い傾向が認められた（表3-2）。高校男子2年の中国・四国、北海道・東北と、高校3年の北海道・東北と九州・沖縄で月飲酒者率が高い傾向であった（表3-3）。中学女子は1年、2年、3年いずれも北海道、北九州で月飲酒者率が高い傾向が認められた（表3-4）。高校1年と3年女子では関東で月飲酒者率が高い傾向が認められた（表3-5）。中学と高校男子では、飲酒頻度と同様の地域別の特徴が認められたが、高校女子ではやや異なる結果であった。

2) 飲酒機会

飲酒機会別の飲酒経験率を見ると冠婚葬祭が男女とも高かった。家族と一緒にいるときも経験率が高かった。この2つの機会は学年が低いときから経験率が高く学年が上がってもさほど上昇しないが、「クラス会、打ち上げ、コンパの時」「居酒屋、カラオケボックス、飲み屋で仲間と」「誰かの部屋で仲間と」飲んだとする者の割合は学年が上がるにつれ急激に上昇した。特に誰かの部屋で仲間と飲んだことのある者の割合は高校3年では男女とも5割前後であった。飲酒機会別の経験率ほどの機会も男女差は小さかった（表4-1）。

3) 飲酒量

飲酒量は答えやすくするためにコップで何杯かに聞き方を統一した。学年が上がるにつれ少量の飲酒をする者の割合が減少し、多量の飲酒をする者の割合が増加した。飲酒するときにはコップ6杯以上飲む者の割合は学年が上がるにつれ増加し、中学1年男子では0.4%（1996年0.6%）にすぎなかった者が高校3年男子では12.1%（1996年15.1%）にのぼった。中学1年女子では0.3%（1996年0.3%）であったのが、高校3年女子では6.3%（1996年6.2%）となった。特につぶれるまで飲むと回答した者の割合が高校3年男子で9.1%（1996年9.4%）も認められ、高校3年女子でも3.5%（1996年3.5%）に認められた（表5-1）。次に、本質問において飲まないと回答した者および無回答だった者を除いた集計では、つぶれるまでと回答した者の割合は高校3年男子で10.9%（1996年10.8%）、高校3年女子で4.2%（1996年4.0%）となった（表5-2）。

4) 初めての飲酒年齢

初めての飲酒年齢をみると、学年が低いほど低年齢で初めて飲酒したと回答している傾向にあった。すなわち、男女とも中学1年では11-12歳と回答した者の割合が最も多かったが、高校3年では15-16歳と回答した者の割合が最も多かった。この理由には飲酒経験の低年齢化、低学年はそれより上の学年を経験していないのでそれだけその学年以下に○をつけ

る者の割合が相対的に多くなること、および学年が上がるほど思いだしのバイアスにより現在年齢に近い経験年齢を答える傾向にあることが考えられる（表6-1）。分母を本質問での飲酒者に限った場合でも傾向は同じであるが、それぞれの年齢で経験した者の割合が高くなる（表6-2）。1996年調査の結果と比較して、男子では8歳以下で経験したものの割合が減少し、女性の減少幅より大きかったので、むしろ女性のほうが8歳以下で経験しものの割合が高い結果が得られた。

我が国では大人が冠婚葬祭などに少量の飲酒を子供にすすめることも多く、初めての飲酒年齢だけでは飲酒経験のよい指標にならないのではないかとの意見もある。従って、本調査では、問題飲酒のひとつの入り口として仲間といっしょに飲むことを上げ、初めて仲間と飲んだ年齢を尋ねた。仲間と初めて飲んだ年齢は、初めて飲んだ年齢よりも高い傾向にあった。男女とも中学1年では9-10歳（1996年では11-12歳）と回答した者の割合が最も高かったが、高校3年では13-14歳（1996年では15-16歳）が最も高かった。学年が上がるにつれ初めて仲間と飲んだ年齢が上がることは、初めての飲酒の場合と同様であった（表7-1）。分母を本質問での飲酒者に限った場合でも傾向は同じであるが、それぞれの年齢での経験率の値が高くなる（表7-2）。この結果は、96年調査に比べ仲間との飲酒経験率は特に男子を中心に減少している（表5-8）が、経験年齢をみると仲間との飲酒経験年齢はさほど変化がない。

5) よく飲むお酒の種類

よく飲むお酒の種類は男子ではビールが最も多く、次いでアルコール度が低く甘いお酒（果物味などの甘いお酒）、焼酎類、であった。焼酎およびサワー類は低学年では多くはないが、学年が上がるにつれ急激に増加し、高校3年男子ではワインや日本酒よりも割合が高かった。逆に、ビールと果物味などの甘いお酒は低学年でも飲まれていた。女子では果物味などの甘いお酒の方がビールよりよく飲まれていた。3番目に多かったのが焼酎およびサワー類であった。女子の場合も焼酎およびサワー類は学年が上がるにつれ増加した（表8-1）。

本質問における飲酒者を分母とした場合は、中学1年男子の50.9%（1996年58%）がビールを飲んでおり、その割合は学年があがるにつれ上昇し高校3年男子では66.5%（1996年77.5%）であった。男子では果物味の甘いお酒を飲む者がどの学年でも飲酒者の5割前後認められた。また、ウイスキー、ブランデー、ウォッカといった強いお酒を飲む者は男子では学年が上がるにつれ増加し、高校3年では飲酒者の12.1%（1996年20.9%）に認められた。強い酒を飲むものの割合が減少したが、焼酎類を飲むものの割合が大幅に増加した（2000年高校3年34.5%、1996年29.3%）。女子ではどの学年でも飲酒者の6～7割以上の者が果物味の甘いお酒を飲んでいて（表8-2）。比較的飲酒頻度が低い者にもよく飲まれている酒の種類はビール、果物味の甘いお酒であった。女子でも強い酒を飲むものの割合がやや減少し、焼酎類を飲むものの割合が増加した（2000年高校3年42.2%、1996年33.8%）。

6) お酒の入手経路

中学1年では男女とも家にあるお酒を飲む者が多かった。その割合は学年があがるにつれ徐々に減少した。次いで、「コンビニエンスストア、スーパーマーケットで買う」「居酒屋等で飲む」「酒屋で買う」「自動販売機で買う」等が多かったが、いずれも学年が上がるにつれ割合が急激に増加した。しかも男女差がさほどないことも特徴であった(表9-1)。本調査の飲酒者数を分母にするとそれぞれの割合が増加した(表9-2)。高校3年男子の飲酒者の6割強がコンビニエンスストアでお酒を買っており、約4割が居酒屋などで飲んでいることが明らかとなった。しかもそれらは女子でもほとんど同様の割合であった。

7) お酒を飲んで失敗した経験

全生徒数を分母とすると、お酒を飲んで失敗した経験は「吐いた」「記憶が消えた」「親にしかられた」の順に多かった。いずれも学年があがるにつれ割合が上昇した(表19-1)。いずれの疾病経験率は男子の方が高かったが、記憶が消えた、や親にしかられた割合は男女差が小さかった。飲酒機会を聞く質問での飲酒者数を分母とすると、高校3年男子の飲酒者の34.7%(1996年37.9%)が既に「吐く」ことを経験しており、16.8%(1996年20.4%)が「記憶が消えた」ことを経験していた(表19-2)。警察沙汰を起こした人も既に認められた。

2. 飲酒行動の関連要因

1) 周囲の者の飲酒行動と生徒の飲酒状況との関連

父が飲酒していると回答した者の割合は、性および学年を問わずほぼ同様に75%前後であった(表10-1)。父の飲酒状況との関連をみると、父が飲酒しない場合の生徒の月飲酒率1とすると、父が飲んでいる場合の飲酒率比が高かった。この比の大きさは、男女とも中高ともほぼ同様であった(表10-2)。

母が飲酒していると回答した者の割合は、男子生徒の回答では学年を問わず50%前後(1996年では45%前後)であったが、女子生徒の回答ではどの学年でも53-5%(1996年では50%)であった(表11-1)。母の飲酒率が増加したことが示唆された。母の飲酒状況との関連をみると、母が飲酒しない場合の月飲酒率を1とすると、母が飲んでいる場合の飲酒率の比が高かった。この比の大きさは父の場合とほぼ同レベルであった。この傾向は男女差は認められなかったが、高校より中学で顕著であった(表11-2)。

飲酒する兄がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。これは生徒の年齢が高いほど兄の年齢も高く従って飲酒率も高いからだと考えられる(表12-1)。兄の飲酒状況との関連をみると、飲酒する兄がいない場合の生徒の月飲酒者率を1とすると、兄が飲んでいる場合の飲酒率の比が高かった。この比の大きさは父母の場合よりもや

や高かった。この傾向は高校より中学で顕著であったが、男女差はさほど認められなかった（表12-2）。

飲酒する姉がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。これは生徒の年齢が高いほど姉の年齢も高く従って飲酒率も高いからだと考えられる（表13-1）。飲む姉がいると回答したものの割合は飲む兄がいると回答したものの割合に近かった。姉の飲酒状況との関連をみると、飲酒する姉がいない場合の生徒の月飲酒者率を1とすると、姉が飲んでいる場合の飲酒率の比が高かった。この比の大きさは父母の場合よりもやや高く、兄の場合と同様であったが、兄の飲酒の影響は男女ともほぼ同じなのに対して、姉の飲酒は女子の飲酒率により影響を及ぼしていた（表13-2）。

飲酒する友達いると回答した者の割合は、男女ともほぼ同レベルで学年があがるにつれ増加した。高校3年生では実に85%前後の者が飲酒する友達を持っていた。（表14-1）。友達の飲酒状況との関連をみると、飲酒する友兄がいない場合の生徒の月飲酒者率を1とすると、友達が飲んでいる場合の飲酒率の比が高かった。この比の大きさは父母の場合や兄や姉の場合よりもやや高かった。この傾向は男女間で差が認められなかったが、男女とも高校で中学よりもやや比が高かった。（表14-2）。

2) お酒を親に勧められた経験, 飲酒をみつかった経験

親にお酒を勧められたことがあると回答した者は男女とも学年が上がるにつれ増加し、高校3年では4割以上であった（表15-1）。親にお酒を勧められたことのない者の月飲酒者率を1とすると勧められたことのある者の飲酒率の比は1より大きかった。その値は男女ほぼ同様であったが、高校生より中学生で高かった（表15-2）。

親にお酒を飲んでいるところを見つかったことがあると回答した者の割合も学年が上がるにつれ増加した。高校3年男子では約5割の者が見つかったことがあると回答していた。この値は男子の方が女子よりやや高かったが、これは男子が女子より飲酒率が高いことを反映しているためと考えられる（表16-1）。親にお酒を飲んでいるところを見つかったことのない者の月飲酒者率を1とすると見つかったことのある者での比は大きかった。これは男女ではほぼ同様の値であったが、高校より中学で比が高い傾向にあった（表16-2）。

3) 未成年の飲酒禁止に対する意見と飲酒状況との関連

未成年の飲酒禁止に対する意見では、中学1年では男女とも「当然である」とする者の割合が最も高いが、学年が上がるにつれ減少し、逆に「しかたがない」、「法律で決める必要はなく個人の好きにさせればよい」と思う者が増加した。高校3年では男女とも「しかたがない」と回答したものが最も多くなった（表17-1）。

飲酒状況との関連をみると、「当然だ」とする者の月飲酒者率を1とすると「成人が飲めず未成年者の飲めないのはおかしい」「法律で決める必要はない」とする者の飲酒率比が1よりも高かった（表17-2）。この傾向も高校より中学で、男子より女子で顕著であった。

4) 飲酒の健康におよぼす影響についての認識と飲酒行動との関連

飲酒の身体への影響についての認識を訪ねる質問では、飲酒は身体に「害がある」と回答した者の割合が最も高かったが、「多少害がある」と回答した者の割合もかなり高かった。男子では学年が上がるにつれ「多少害がある」と回答する者の割合が増加し、高校では「害がある」とする者の割合を越えた(表18-1)。高校3年男子では1割以上の者が「健康によい」と回答していた。

飲酒状況との関連をみると、「害がある」とする者の月飲酒者率を1とすると、「健康によい」とする者の飲酒率比が1より高い傾向にあった。また、「どちらでもない」「多少害がある」とした者でも飲酒率比が1より高かった(表18-2)。この傾向は高校に比べ中学で、高校男子に比べ高校女子で顕著であった。

5) 飲酒と関係がある疾病や出来事についての知識と飲酒行動との関連

飲酒に関係がある疾病や出来事についての知識の正解率をみると、「インフルエンザ(誤り)」「肺ガン(誤り)」「急性アルコール中毒(正解)」「アルコール依存症(正解)」での正解率が男女とも高かった。しかし、「脳の萎縮(正解)」「胎児への影響(正解)」の正解率は低かった。「交通事故」でも半数前後の正解率しかなかった。「胎児への影響」の正解率は男子より女子が高かった(表20-1)。

飲酒状況との関連を見ると、全問正解者の月飲酒者率を1とすると、正解率が低くなっても月飲酒者率が高くなり、比があまり変化しないことが明らかになった(表20-2)。知識と行動は単純には結びついていないのかもしれない。

6) 飲酒に関する教育の記憶と飲酒状況との関連

学校で飲酒と健康についての教育を受けたと覚えている者の割合は、高校1年で最も高かった。この割合は中学より高校で高い傾向にあった。ないとする者や覚えていないとする者の割合が中学校で高かった(表21-1)。これは、飲酒防止教育が高校1年を中心に実施されていることによるのかもしれない。

飲酒状況との関連をみると、「教育を受けた」とする者の月飲酒者率を1とすると、受けなかったあるいは覚えていないと回答した者の飲酒率比は高校で1よりもわずかに大きかった(表21-2)。

家族と未成年の飲酒について話したことがあると回答した者の割合は、学校で飲酒と健康について習ったとする者の割合よりずっと低かった。家族で話したことがあると回答した者の割合は学年が上がるにつれわずかに増加した(表22-1)。

飲酒状況との関連をみると、「話したことがある」と回答した者の月飲酒者率を1とすると、ないと回答した者の飲酒率比は1か、むしろ1よりやや低かった(表22-2)。家で話

すことが予防につながるかのうせいはあるものの、子どもの飲酒がきっかけで家族で話す場合もあり、両方が混在しているため比が変わらなくなるのかもしれない。

3. 喫煙行動

1) 喫煙経験者率、喫煙率

性別学年別喫煙経験者率をみると、男女とも学年が上がるにつれ喫煙経験者は増加した。男子では中学1年生で経験者率は既に22.5%（1996年29.9%）あり、高校2年より経験者は過半数に達した。女子でも中学1年生で経験者率は16.0%（1996年16.7%）あり、高校3年では4割近くに上った（表23-1）。

学年別に初めての喫煙経験学年を尋ねたところ、男女とも中学3年までは小学校4年以下と回答した者の割合が最も高かった。次いで現在の学年より1あるいは2年くらい前と回答する者の割合が高かった。男女とも高校1年では、中学2年、3年に経験したものの割合が高かった。高校2年、3年では、男子は中学2年、3年、女子では中学3年、高校1年と回答したものの割合が高かった。女子の方が男子よりやや高い学年で初めての喫煙を経験している傾向が認められた。これらによりかなりの者が小学校のうち、しかも低学年で喫煙を既に経験していることが分かる（表24-1、表24-2）。1996年調査と比較すると、特に低学年が小学生時代に経験した割合の減少が男女ともに認められ、これらは喫煙経験の低年齢化に歯止めがかかったことを示唆する（表24-1）。この傾向は男子のほうでより顕著であった。

この30日間に1日以上喫煙した月喫煙者率は中学1年男子で5.9%（1996年7.5%）であったのが学年が上がるにつれ増加し、高校3年では36.9%（1996年36.9%）にのぼった。そのうち毎日喫煙者（30日間毎日喫煙）の割合は中学1年ではわずか0.5%（1996年0.7%）にすぎなかったのが、高校3年男子では25.9%（1996年25.4%）に達し、月喫煙者のかなりの部分を占めるに至った。女子でも中学1年の月喫煙者率はわずか4.3%（1996年3.8%）であったが、学年が上がるにつれ増加し高校3年では16.2%（1996年15.6%）に達した。毎日喫煙者も高校3年では8.2%（1996年7.1%）認められた。男女とも中学と高校の間に月喫煙者率と毎日喫煙者率の飛躍が認められた（表25-1）。地域別にみると中学男子では月喫煙者率が高いのは、北海道であった（表25-2）。高校1年男子では、九州・沖縄、2年男子では、北海道・東北、九州・沖縄、3年男子では、北海道・東北、九州・沖縄で高かった（表25-2）。中学女子では、北海道の月喫煙者率が高かった（表25-3）。高校女子では、2、3年で北海道・東北の月喫煙者率が高い傾向が認められた（表25-5）。

2) 喫煙本数、たばこの入手経路

1日平均喫煙本数をみると、この質問での喫煙者を分母にした割合を算出すると、男子では1本未満あるいは1-4本吸う者の割合は学年が上がるにつれ減少するが、5-9本、10-14本、15-19本、20本以上吸う者の割合は学年が上がるにつれ増加した。女子では1本未満の

者の割合は学年が上がっても減少しなかったが、1-4本吸う者と5-9本吸うものの割合は学年が上がるにつれ大きく増加した。10-14本、15-19本、20本以上吸う者の割合も学年が上がるにつれ着実に増加した。男女を比較すると男子の喫煙本数のほうが多かった（表26-1、26-2）。学年が低いと喫煙本数の質問に無回答のものが多かったが、学年が上がるにつれ急激に減少した。これは、喫煙習慣が成立し、自分の喫煙本数を回答しやすくなるためと考えられる。

喫煙者のたばこの入手方法をみると、中学1年の男子では自動販売機が最も多く、次いで誰かからもらった、家にあるたばこを吸ったが多かった。これらは喫煙習慣が成立している者の割合が低く、喫煙量も少ないからであると考えられる。喫煙を始めたばかりの者のたばこ入手を周囲の喫煙者のたばこが支えているといえ、このような場合、家族内に喫煙者がいて家にたばこがおいてある状況は好ましくないと言える。学年が上がるにつれ自動販売機、コンビニエンスストア・スーパーマーケット・ガソリンスタンド等の店、たばこ屋で買う者の割合が急増した。高校3年男子では喫煙者の75.7%（1996年74.4%）が自動販売機から買っており、コンビニやたばこ屋といった対面販売の場でもそれぞれ49.8%（1996年40.3%）、25.1%（1996年26%）の者が買っていた。誰かからもらった、家にあるたばこを吸ったとする者の割合はあまり変化がなかった。中学1年女子では誰かからもらったが、最も多く、次いで自動販売機、家にあるたばこを吸うの順に多かった。女子でも学年が上がるにつれ自動販売機、コンビニ等およびたばこ屋で買う者の割合が増加した。特に自動販売機で買う者が増加し、高校3年女子では喫煙者の51.8%（1996年46.5%）が自動販売機を用いていた。次いで誰かからもらったの21.4%（1996年23.9%）、コンビニ等の26.2%（1996年19.45）であった。高校3年女子では7.3%（1996年8.7%）の者がたばこ屋で買うと回答しており、女子でもかなりの喫煙者が対面販売の場で購入していることが明らかになった（表27-1、27-2）。これらは、業界（全国たばこ販売協同組合連合会）の自主規制により1996年より順次始まった自動販売機の夜間稼働停止（夜11時より翌朝5時まで）およびコンビニ等における未成年者へのたばこや酒類販売禁止の徹底の効果がほとんど現れていないという結果であるといえる。

4. 喫煙行動の関連要因

1) 周囲の者の喫煙行動と生徒の喫煙行動との関連

父が喫煙していると回答した者の割合は、性および学年を問わずほぼ同様に52~55%前後であった（表28-1）。父が以前吸っていたが今は吸っていないのは11~14%であった。父の喫煙状況別の生徒の喫煙率をみると父がたばこを吸っていないときの生徒の月喫煙者率を1とすると父がたばこを吸っているときの月喫煙者率比は中学男子で2.0（1996年で1.6）、高校男子で1.6（1996年で1.5）、中学女子で2.4（1996年で1.8）、高校女子で1.9（1996年で1.5）であった。父が禁煙者である場合でもは月喫煙者率比が高い傾向が認めら

れた（表28-2）。高校に比較して中学が、男子に比べて女子の率比が高い傾向が認められた（表28-2）。

母が喫煙していると回答した者の割合は、男女、学年を問わず15-19%（1996年では13~15%前後）であった（表29-1）。母が以前吸っていたが今は吸っていないのは3~4%であった。母の喫煙率が近年増加していることが窺えた。母が吸っていると回答した生徒の月喫煙者率を1とすると母がたばこを吸う場合の喫煙者率比は中学男子で2.3（1996年で1.9）、高校男子で1.6（1996年で1.5）、中学女子で3.1（1996年で2.7）、高校女子で2.3（1996年で2.2）倍高かった。いずれも父親の場合よりも率比が高かった。また女子の方が男子よりも率比が高かった。母が禁煙者の場合の率比も高かった（表29-2）。高校より中学で、男子より女子で率比が高かった。

喫煙する兄がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。これは生徒の年齢が高いほど兄の年齢も高く従って喫煙率も高いからだと考えられる。また吸う兄がいる者の割合には男女差は認められなかった（表30-1）。兄がいるが喫煙しない場合の生徒の月喫煙者率を1とすると、吸う兄がいる場合の月喫煙者率比は、中学男子で3.3（1996年で3.1）、高校男子で2.1（1996年で2.1）、中学女子で4.2（1996年で3.2）、高校女子で2.2（1996年で2.2）であった。中学では女子の率比が男子より高く、高校より中学で比が高かった（表30-2）。

喫煙する姉がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。これも生徒の年齢が高いほど姉の年齢も高く従って喫煙率も高いからだと考えられる。また吸う姉がいる者の割合には男女差は認められなかった（表31-1）。姉がいるが喫煙しない場合の生徒の月喫煙者率を1とすると、吸う姉がいる場合の月喫煙者率比は、中学男子で3.5（1996年で3.0）、高校男子で1.9（1996年で1.7）、中学女子で4.9（1996年で4.8）、高校女子で3.2（1996年で3.2）であった。男子より女子の月喫煙者率が高く、高校より中学で比が高かった。男子の値は兄の場合と同様であったが、女子の値は兄での月喫煙者率比より姉の率比が大きかった（表31-2）。母の結果もあわせて考えると女子の喫煙は母や姉といった家庭内の同性の喫煙行動に男子よりも影響を受けやすいことが推察される。

喫煙する友人がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。特に中学から高校に上がる時に割合が急増した。高校3年男子では84.8%（1996年で82.4%）の者がたばこを吸う友人を持っており、女子でも67.3%（1996年で64.8%）がたばこを吸う友人を持っていた（表32-1）。友人がいるが喫煙しない場合の生徒の月喫煙者率を1とすると、吸う友人がいる場合の月喫煙者率比は、中学男子で9.5（1996年で7.9）、高校男子で14.0（1996年で13.0）、中学女子で15.1（1996年で13.0）、高校女子で20.0（1996年で19.9）であった。男子より女子の率比が高かった。家族の喫煙状況とは逆に中学より高校生で率比が高かった（表32-2）。周囲にものの喫煙の影響は大きく、特に中学では1996年よりも率比が上がっているものが多いことが示唆された。

現在の喫煙状況の自己判断をみると、習慣的喫煙者率が学年とともに上昇したが、この値はこの30日間の喫煙日数を尋ねた質問での毎日喫煙者率に近く、それよりわずかに高い値を示した（表33-1）。吸ったことがないと試喫煙の割合を合計すると、この30日間の喫煙日0のものの割合よりわずかに多くなった。時々喫煙と習慣的喫煙の割合を加えると、月喫煙者率よりわずかに少ない値となった。

喫煙者の喫煙銘柄は学年が上がるにつれ変更したとするものの割合が増加した。中学3年以降では同じ銘柄を吸い続けるものの割合より変更したものの割合が高くなった（表34-1）。

親にたばこを勧められた経験を尋ねると、男子では学年を問わず3-5%が勧められた経験を持っていた。女子では2%強の者が勧められた経験を持っていた（表35-1）。親に喫煙を勧められたことのない者の月喫煙者率を1とすると、勧められた経験を持つ者の月喫煙者率比は中学男子で3.8（1996年で3.1）、高校男子で1.7（1996年で1.6）、中学女子で4.9（1996年で4.4）、高校女子で2.4（1996年で2.4）であった。男子よりも女子で比が高く、高校より中学で比が高かった（表35-2）。すなわち喫煙率が低い集団では親の影響が大きいことが推察される。

親にたばこを吸うのを見つけた経験を尋ねると、男子では学年が上がるにつれ見つけた経験を持つ者の割合が増加した。高校3年男子では30.2%（1996年で29.3%）の者が親に喫煙を見つけた経験を持っていた。女子では高校生で学年が上がるにつれ見つけた経験を持つ者の割合が上昇した（表36-1）。これは喫煙頻度が高いほど見つけやすいので当然の結果ではある。親にたばこを吸うのを見つけた経験のない者の月喫煙者率を1とすると、勧められた経験を持つ者の月喫煙者率比は中学男子で8.7（1996年で6.9）、高校男子で6.2（1996年で5.7）、中学女子で11.7（1996年で10.3）、高校女子で10.0（1996年で9.1）であった。男子よりも女子で比が高く、高校より中学でやや比が高かった（表36-2）。

2) たばこの身体への害の認識と喫煙状況

たばこの身体への害の認識について尋ねると、男子ではどの学年でも88-90%の者が害があると回答していた。害はないと回答した者は2%強で、多少あると回答した者は4-5%であった。女子は害があると回答した者の割合はさらに高く、92-95%であり、害はないとする者の割合は1%台であり、多少あると回答した者の割合は2-3%であった（表37-1）。害があると回答した者の月喫煙者率を1とすると害がないあるいは多少あると回答した者の月喫煙者率比は中学男子でそれぞれ2.9、4.3（1996年で2.7、3.9）、高校男子で1.2、2.2（1996年で1.1、1.9）、中学女子で4.0、5.6（1996年で4.1、5.6）、高校女子で1.7、3.7（1996年で1.4、3.8）であり、害がないと回答した者より多少あると回答した者の月喫煙者率比の方が高かった。特に高校生では害がないとした者の率比が1に近かった。また男子より女子の方が率比が大きかった（表37-2）。

3) 飲酒率、喫煙率のまとめ、飲酒率と喫煙率の関係

表38-1には、飲酒経験率、飲酒率、喫煙経験率、喫煙率等をまとめたものである。地域ブロック別の値も掲載した(表38-2、38-3)

飲酒経験のある者は経験のない者に比べ喫煙経験率、月喫煙率、毎日喫煙率いずれも高かった。率比は中学より高校で高く、男子より女子で高かった(表38-4)。この傾向は仲間との飲酒経験の有無別にみても同様であった(表38-5)。月飲酒の有無別にみると月飲酒者の喫煙経験率、月喫煙者率および毎日喫煙者率のいずれも高かった。しかし、率比は高校より中学の方がやや高く、男子より女子で高かった(表38-6)。率比の大きさは、月飲酒の有無別にみたものが、飲酒経験や毎日飲酒の有無別にみたものより小さかった。毎日飲酒の有無別にみると、毎日飲酒者の喫煙経験率、月喫煙率、毎日喫煙率いずれも高かった。毎日飲酒しない者の率を1とすると、率比は高校より中学で高く、男子より女子で高かった(表38-7)。表39は飲酒頻度と飲酒量を用いて分類した問題飲酒群判定のスコア計算結果である。問題飲酒群が学年が上がるにつれ増加している(QFスコア3)。

5. 生活習慣と飲酒行動、喫煙行動との関連

1) 食習慣と飲酒行動、喫煙行動

朝食をほとんど毎日食べると回答した者の割合はかなり高かったが、学年があがるにつれ減少していた。また、女子より男子でいつも食べる者の割合が低かった(表40-1)。ほとんど毎日食べると回答した者の月飲酒者率および月喫煙者率を1とした場合のほとんど食べない者の率比は、中学男子でそれぞれ1.3、2.8(1996年で1.4、2.7)、高校男子で1.2、1.9(1996年で1.3、2.0)、中学女子で1.3、3.0(1996年で1.5、4.6)、高校女子で1.2、2.2(1996年で1.4、3.1)であり、月飲酒者率比、月喫煙者率比ともに高校より中学で高かったが、男女差はほとんど認められなかった(表40-2)。月飲酒者率における率比よりも月喫煙者率における率比の方が大きかった。男子では、月飲酒者率比も月喫煙者率比も前回調査の結果とほぼ同レベルであったが、女子では月喫煙者率比の値が減少した。飲酒の場合、前日の飲酒により次の日の朝起きられなくて朝食を食べないこともあり、その場合率比が大きくなると予測されたが、結果は朝食と一見関係が薄いようにみえる月喫煙者率比の方が高かった。

牛乳をほとんど毎日飲む者の割合は学年が上がるにつれ減少した。また、女子より男子の方がほとんど毎日飲む者の割合高かった(表41-1)。ほとんど毎日飲む者の月喫煙者率を1とするとほとんど飲まない者の月飲酒者率比は中学男子で1.1(1996年で1.2)、高校男子で1.2(1996年で1.2)、中学女子で1.3(1996年で1.3)、高校女子で1.2(1996年で1.1)とどのカテゴリーも1に近かった。1996年の調査結果と比較してもほとんど率比は変化がな

かった。月喫煙者率比は月飲酒者率比よりも高く、中学男子で1.9（1996年で1.9）、高校男子で1.9（1996年で1.8）、中学女子で3.0（1996年で2.4）、高校女子で2.2（1996年で2.0）であり、男子よりも女子で率比が高く、女子では高校より中学で高かった（表4 1-2）。1996年の結果と比較すると中学女子の率比が低下した。

コーヒーまたは紅茶をほとんど毎日飲む者の割合は学年が上がるにつれ増加した。また、男女差はさほど認められなかった（表4 2-1）。コーヒーや紅茶に砂糖をいれるかどうかを尋ねたところ、スプーン換算でも包み換算でも入れない者の割合は学年が上がるにつれ増加するもの入れるものよりかなり少なかった。砂糖を入れる者は多くは1杯あるいは1包であったが、かなりの砂糖をいれる者の認められた（表4 2-2、4 2-3）。ほとんど飲まない者の月飲酒者率を1とするとほとんど毎日飲む者の月飲酒者率比は中学男子で2.0（1996年で1.9）、高校男子で1.4（1996年で1.3）、中学女子で1.7（1996年で1.8）、高校女子で1.3（1996年で1.3）と中学より高校で高い傾向が認められたが、男女差は小さかった。また、1996年調査と比較すると男女、中学高校とも率比に変化はほとんど見られなかった。月喫煙者率比は中学男子で2.0（1996年で1.7）、高校男子で1.5（1996年で1.4）、中学女子で1.5（1996年で1.7）、高校女子で1.1（1996年で1.3）であった。高校より中学で比が高かったが、男女差は認められなかった（表4 2-4）。1996年の結果と比較して率比はほとんど変化がなかった。コーヒーや紅茶に砂糖を入れることは、飲酒率にはほとんど関連していなかったが、月喫煙者率比をみると、入れない者に比べ3杯、4杯以上あるいは3包、4包以上入れる者の率比が高くなっていた（表4 2-5、4 2-6）。飲酒率に比べ喫煙率の率比が高く、男女差はさほどなく、高校より中学で率比が高かった（表4 2-5、4 2-6）。

炭酸飲料をほとんど毎日飲む者の割合は女子では学年が上がるにつれわずかに減少したが、男子ではほぼ横ばいであった。また、女子より男子の方がほとんど毎日飲む者の割合高かった（表4 3-1）。ほとんど飲まない者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とするとほとんど毎日飲む者の月飲酒者率比及び月喫煙者率比は中学男子でそれぞれ1.5、3.0（1996年で1.5、2.6）、高校男子で1.3、2.1（1996年で1.3、2.0）、中学女子で1.7、4.1（1996年で1.6、4.5）、高校女子で1.3、2.4（1996年で1.3、2.4）であった。飲酒率に比べ喫煙率の率比が大きく、男子より女子で、高校より中学で率比が高かった（表4 3-2）。1996年の結果と比較して中学男子の喫煙率比がやや上昇し、中学女子の喫煙率比がやや低下した。

ジュースをほとんど毎日飲む者の割合は男子では中学より高校で高かったがそれぞれでの学年間の差はあまり認められなかった。女子では中学3年と高校3年でやや低かった（表4 4-1）。ほとんど飲まない者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とするとほとんど毎日飲む者の率比は中学男子でそれぞれ1.2、2.1（1996年で1.3、2.2）、高校男子で1.3、2.0（1996年で1.2、2.0）、中学女子で1.3、2.5（1996年で1.3、2.3）、高校女子で1.2、2.0（1996年で1.2、2.1）であった。飲酒率に比べ喫煙率の率比が大きく、男女差、中高差ともに認められなかった（表4 4-2）。1996年の結果と比較してもほとんど変化はみられなかった。

スナック菓子を食べる頻度をみると、ほぼ毎日食べる者の割合は男子より女子で高く、学年が上がるにつれ減少した（表45-1）。時々食べる者を含めればかなりの割合の者がスナック菓子を食べていた。ほとんど食べない者の月飲酒率比及び月喫煙率比を1とすると、ほぼ毎日食べる者の率比は、中学男子でそれぞれ1.0、1.5、高校男子で1.0、1.2、中学女子で1.0、1.5、高校女子で1.0、1.4であり、飲酒率への影響はほとんど認められなかった（表45-2）。

3) 睡眠障害との関連

この30日間に寝つきがわるかった頻度（しばしばあると常にあるの合計）は、男子では中学1年、2年で低くその後上がるがあまり増加せず高校3年で再び増加した。女子では学年が上がってもほとんど増加しなかった。中学1年、2年では女子における割合の方が高く、高校3年では、男子のほうが高いが、ほかの学年ではほぼ同レベルであった（表46-1）。寝つきが悪いことが全くない者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とすると、寝つきがわるいのが常にある者の率比は、中学男子で1.7、3.4、高校男子で1.3、2.1、中学女子で1.8、3.2、高校女子で1.4、3.6であった。飲酒の率比より喫煙の率比が高く、高校より中学の率比が高く、男子より女子の率比が高かった（表46-2）。

この30日間の平均睡眠時間をみると、中学男子では7-8時間、高校1年、2年男子では6-7時間、高校3年男子では5-6時間であった。女子では中学1年、2年で7-8時間、中学3年で6-7時間、高校で5-6時間と男子に比べ睡眠時間が短くなる傾向が認められた（表47-1）。睡眠時間が9時間以上の者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とすると、5時間未満の率比は、中学男子でそれぞれ1.4、2.3、高校男子で1.0、1.0、中学女子で1.4、2.6、高校女子で0.9、1.0と高校になると関連しなくなる。これは、9時間以上睡眠する者の飲酒率及び喫煙率が7-8時間、8-9時間睡眠する者より高く、高校では男女とも5時間未満群とほぼ同レベルになることによる。従って比較的長めの睡眠時間（8-9時間、7-8時間）を基準にとると短めの睡眠時間（5時間未満、5-6時間）の率比が1より高くなる。

この30日間の平均就寝時間と起床時間をみると、学年があがるにつれ就寝時間が遅くなり、起床時間はさほど変わらないこと、男女差はあまり認められないことが明らかになったが、24時間法で記載したと考えられる者と12時間法で記載したと考えられる者が混在してしまい、詳細な分析には至らなかった（表48-1、48-2）。

この30日間に昼間に眠気を感じる頻度をみると、学年があがるにつれ「全くない」ものの割合が減少し、「しばしばある」「常にある」者の割合が増加した。男子よりも女子に眠気を感じる者の割合がやや高かった（表49-1）。眠気を全く感じない者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とすると、常にある者の率比は、中学男子でそれぞれ1.9、3.2、高校男子で1.9、2.1、中学女子で2.0、3.4、高校女子で1.6、2.0であり、男女差は認められなかったが、高校より中学で率比が大きく、飲酒率比より喫煙率比の方が高かった（表49-2）。

自分の睡眠の質の評価をみると、非常に良いと回答した者の割合が男子では中学より高校で減少する傾向が認められたが、女子では学年があがってもほぼ横ばいであった。かなり悪いと判断した者の割合は男子では中学より高校で多かったが、女子ではほぼ横ばいであった。非常に悪いとした者の割合は男子では中学3年より増加してその後横ばいとなったが、女子ではどの学年もほぼ同レベルであった(表50-1)。「非常によい」と回答した者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とすると、「非常に悪い」と回答した者の率比は、中学男子ではそれぞれ、1.6、2.3、高校男子では、1.3、1.6、中学女子では、1.6、2.5、高校女子では、1.3、2.7となり、飲酒率比より喫煙率比が高く、男子では高校より中学で高く、高校で男子よりも女子で喫煙率比が高い傾向が認められた(表50-2)。

4) 学校生活との関連

クラブ活動の参加状況を見ると、積極的参加の割合が学年が上がるにつれ減少した。この割合の男女差はほとんど認められなかった(表51-1)。積極的に参加している者の月喫煙者率を1とすると不参加の者の月飲酒者率及び月喫煙者率比は中学男子でそれぞれ、1.1、2.1(1996年で1.1、1.9)、高校男子で1.2、2.0(1996年で1.1、1.7)、中学女子で1.3、2.7(1996年で1.2、2.6)、高校女子で1.3、3.8(1996年で1.3、3.1)であった。飲酒者率比より喫煙者率比が高く、喫煙者率比では男子より女子で比が高かったが、女子の喫煙者率比のみ高校の方が高く、飲酒者率比では中高差はあまり認められなかった(表51-2)。

学校が楽しいと回答した者の割合は男子では中学と比較して高校で減少したが、学年別の割合ははっきりした特徴が認められなかった。女子では中学3年でやや割合が高く、他の学年ではほぼ同様の割合であった。高校では男子に比べ女子の方が楽しいと回答した者の割合が高かった(表52-1)。学校が楽しいと回答した者の月飲酒者率及び月喫煙者率を1とすると楽しくないと回答した者の率比は中学男子でそれぞれ1.3、2.6(1996年で1.5、2.7)、高校男子で1.1、1.7(1996年で1.1、1.8)、中学女子で1.4、2.6(1996年で1.5、3.5)、高校女子で1.2、2.5(1996年で1.2、2.7)であった。飲酒者率比よりも喫煙者率比が高く、高校の喫煙者率比が男子よりも女子で高く、高校よりも中学で率比が高い傾向にあった(表52-2)。1996年の結果と比較して中学女子の喫煙者率比が低下したことが認められた。

5) 気分の落ち込み、興味や楽しみがもてないことと飲酒行動、喫煙行動

この2週間の間に興味や楽しみが持てなかった期間をたずねると、数日間と回答した者の割合が最も高く、男子では中学より高校で割合が上昇したが、学年別にははっきりした特徴は認められなかった。女子では、男子に比べて特に中学で興味や楽しみが持てない日が全くなかった割合がやや低く、数日間あったとする者の割合がやや高かった(表53-1)。男女